聖霊降臨後第21主日（特定23）　マルコ10章17―27節

［直訳］

17 そして　彼が出て行くと　道の中へ、
一人が走り寄って　そして　ひざまずいて　彼に、
尋ねた　彼に、
「よい先生、何を　私はすべきでしょう
ようにと　永遠の命を　私が相続する」

18 だが　イエスは　言った　彼に、
「なぜ　私を　あなたは言う　よいと
誰もない　よい　神ひとりのほかは。

19 戒めを　あなたは知っている。
『あなたは殺すな。　あなたは姦淫するな。
あなたは盗むな。　あなたは偽証するな。
あなたはだまして奪うな。
あなたは敬え　あなたの父と母を。』

20 だが彼は　語った　彼に、
「先生、これらすべてを　私は守った　私の若い頃から。」

21 だが　イエスは　彼を見つめて　彼を愛した、
そして　言った　彼に、
「一つのことが　あなたに　欠けている。
行きなさい、　あなたが持っているものを　売りなさい、
そして　与えなさい　貧しい人たちに、
そして　あなたは持つだろう　宝を　天において、
そして　さあ　従いなさい　私に。」

22 だが彼は　気を落として　その言葉によって、
立ち去った　悲しみながら。
なぜなら彼は持っていた　多くの所有物を。

23 そして　見回して　イエスは　言う　彼の弟子たちに、
「なんと苦労して　富を持つ者が　神の国の中へ　入るだろう。」

24 だが　弟子たちは　衝撃を受けた　彼の言葉によって。
だが　イエスは　再び　答えて　言う　彼らに、
「子たちよ、なんと苦労である　神の国の中へ　入ることは。

25 より楽である　らくだが　針の穴を通って　通り抜けることは
　金持ちが　神の国の中へ　入ることよりも。」
26 だが彼らは　よりいっそう　唖然とした
　言いながら　彼ら自身に向かって、
「そして　誰が　できる　救われることが」
27 彼らを見つめて　イエスは　言う、
「人間たちに　不可能で、　しかし　神にはない。
　なぜならすべては　可能で　神に。」

［新共同訳］
17 イエスが旅に出ようとされると、ある人が走り寄って、ひざまずいて尋ねた。「善い先生、永遠の命を受け継ぐには、何をすればよいでしょうか。」18 イエスは言われた。「なぜ、わたしを『善い』と言うのか。神おひとりのほかに、善い者はだれもいない。19『殺すな、姦淫するな、盗むな、偽証するな、奪い取るな、父母を敬え』という掟をあなたは知っているはずだ。」20 すると彼は、「先生、そういうことはみな、子供の時から守ってきました」と言った。21 イエスは彼を見つめ、慈しんで言われた。「あなたに欠けているものが一つある。行って持っている物を売り払い、貧しい人々に施しなさい。そうすれば、天に富を積むことになる。それから、わたしに従いなさい。」22 その人はこの言葉に気を落とし、悲しみながら立ち去った。たくさんの財産を持っていたからである。
23 イエスは弟子たちを見回して言われた。「財産のある者が神の国に入るのは、なんと難しいことか。」24 弟子たちはこの言葉を聞いて驚いた。イエスは更に言葉を続けられた。「子たちよ、神の国に入るのは、なんと難しいことか。25 金持ちが神の国に入るよりも、らくだが針の穴を通る方がまだ易しい。」26 弟子たちはますます驚いて、「それでは、だれが救われるのだろうか」と互いに言った。27 イエスは彼らを見つめて言われた。「人間にできることではないが、神にはできる。神は何でもできるからだ。」

①構成

主題は「永遠の命を相続し、神の国に入るためには何を行う必要があるか」ということであり、それが二組の対話によって明らかにされる。

ⓐ 17―22 節

㋐この段落は対話のきっかけを述べる 17 節と対話の結果を描く 22 節によって囲まれている。イエスが道へと出て行くと、一人の男がイエスに「走り寄って」、「ひざまずいて」、彼に「尋ねる」（17 節）。こうして対話が始まるが、しかし「気を落として」、「悲しみながら」、「立ち去った」という別離で終わる（22 節）。この段落の最後になって、この男が資産家であったと初めて述べられ、富の危険性が強調される。

㋑18―21 節がイエスと男の対話だが、20 節の男の発言をはさんで、その前後にイエスの忠告が描かれている（18―19 節と 21 節）。ここで注目すべき表現は、21 節の「イエスは彼を見つめて、彼を愛した」、と「さあ、私に従いなさい」だろう。この言葉に表されているように、イ

エスは愛に包んで忠告を述べ、「さあ」という呼びかけで閉じている。イエスの忠告は招きである。

ⓑ23―27節

この段落では「神の国に入る」が三度、「なんと苦労」が二度繰り返されていることから明らかなように、資産家が「神の国に入る」のは、「なんと苦労」なことかがテーマとなる。

②資産家とイエスの対話（17―22節）

ⓐ17節に登場する男が「永遠の命」を真剣に求めていることは、走り寄ってひざまずく姿に明確に示されている。ところが22節では、彼は悲しみながら立ち去って行く。この変化を引き起こしたのは、22節に「その言葉によって」とあるように、イエスの言葉である。彼はイエスの言葉を受け入れられなかった。

ⓑ「永遠の命」は、神の支配が世の隅々にまで及ぶ終わりの日に神から与えられる命のことであり（マコ一〇30、マタ一九16・29、二五46、ルカ一八30）、終末への期待を強く持っていた初代教会では、終末の救いと深く関わる言葉として使われ、永遠の命を受け継ぐにはどう生きるべきかが真剣に問われた（マタ一九16も参照）。

ⓒ「よい先生」と呼びかけた男に、「よい」方は神だけだ、とイエスは答える。なぜなら、神のほかは、誰も「永遠の命」への道を示すことはできないからだ。イエスはこうして、男の姿勢を神へと向け、神の言葉である十戒を示す（19節）。

ⓓこの男がその「すべてを守った」と答えると、イエスは、一つだけ欠けていることがあると指摘し、財産を「売って、貧しい人たちに与えなさい」と教えてから、「さあ、私に従いなさい」と招く。だが、イエスが「施し」を求めたのは、永遠の命を相続するために十戒では不十分であるから、「施し」という新しい掟を加えたのではない。むしろ、十戒は「施し」をも含んでいるのである。

ⓔ十戒を「若い頃」から守ってきたこの男にとって、掟は個人が永遠の命に入るための個人的な倫理である。掟を守ることに懸命な彼の視野には隣人の姿が入らない。しかし、十戒は人が隣人と共に生きるために与えられた神の指示である。イエスにとって、隣人との関わりを欠いた十戒は無意味である。パウロも『『姦淫するな、殺すな、盗むな、むさぼるな』、そのほかどんな掟があっても、『隣人を自分のように愛しなさい』という言葉に要約されます」（ロマ一三9）と述べて、イエスの考えを受け継いでいる。十戒を真に生きる者はおのずと「施す」者になる。

ⓕイエスは21節で男に「施し」を求めるとき、「彼を見つめて、彼を愛した」と述べられている。それは、神の愛に包まれることによって、彼に欠けたものが満たされるからである。愛が掟を守らせる。

ⓖしかし、この男は「気を落として、立ち去った」。彼の心ではイエスの指示の正しさを認める思いと、富への執着とが激しくぶつかった違いない。その葛藤から抜け出すために選んだ道は、「悲しみながら、立ち去る」ことであった。マルコは段落の終わりになって初めて、この男が資産家であったと述べている。それは富がいかに重荷となるかを印象づけるためである。

③弟子とイエスの対話（23―27節）

ⓐ23節で、富める者が神の国に入るのは難しいとイエスが語ると、その「言葉によって」弟子たち

は「衝撃を受けた」。22節にも「言葉によって」とあり、立ち去った資産家もイエスの言葉から衝撃を受けたことが述べられている。富を神の祝福と考える通念に囚われているなら、イエスの言葉は「気を落とさせ、悲しませ」、「衝撃を与える」ものである。金持ちだけでなく、弟子たちにとっても神の国に入るのは「苦労」の伴うことである。それは人が神の力に信頼できず、この世の力にすがるからである。富はこの世にあって最も頼りになると思われているだけに、それは捨てがたいものとなる。

ⓑらくだが針の穴を通る

写本の中には「らくだ（カメーロン）」の代わりに、カミロン〈綱・ケーブル〉と読むものもあるが、これはたとえの不自然さを和らげようとする試みである。また、「針の穴」とはエルサレムの城壁にあった、らくだがやっと通り抜けられる狭い戸口のことだ、とする解釈もあるが、このような合理化は、たとえが元来もっていたユーモアを壊してしまう。この種の誇張されたたとえは、ほかにもある。ルカ 6 章 41 節「あなたは、兄弟の目にあるおが屑は見えるのに、なぜ自分の目の中の丸太に気づかないのか」、また、マタイ 23 章 24 節「ものの見えない案内人、あなたたちはぶよ一匹さえも漉して除くが、らくだは飲み込んでいる」のように、不可能さや馬鹿らしさを強調する表現である。

ⓒなぜなら神にはすべてが可能だから

誰が救われるのかと問う弟子たちをイエスは「見つめて」言う。21節の「見つめて」と同じエンブレポーである。イエスは弟子に視線を向けて、さとすように教える。イエスは「なぜなら神にはすべてが可能だから」と述べて、神の力を強調し、神こそが救いへの唯一の道であると説く。神の国へ入ることを妨げているものは富だけではない。神の力に信頼できずに、この世の力にすがることが、人を神の国から遠ざけている。富もこの世の力の一つである。とすると、神の国に人が入れないのは、結局は神に信頼できないからである。「神は何でもできる」は旧約聖書によく使われる言葉であり（ヨブ四二 2、創一八 14）、イエスはこの言葉によって弟子から将来への不安を取り去ろうとする。神に信頼しきれない者をも、神は愛をもって包む。この愛の中で、人はこの世の力から離れ、神の力に身を委ねることができる。

④神に目を向ける

ⓐ掟が与えられたのは、永遠の命にふさわしくない者をふるい落とすためではない。人が隣人と共に真の命を十分に生きるためである。だから隣人愛こそすべての掟を要約する目標となる。だが、富に象徴されるこの世の力への信頼を捨て切れない私たちにとって、それは「不可能で」ある（27節）。人間に不可能であるが、「神には不可能ではない」とイエスは言う。万事が可能である神からの力に身を委ねるとき、人間に不可能なことも神の力によって可能になる。イエスは資産家にも弟子たちにもその視線を神へと向けるように促す。そのイエスの愛にあずかるとき、すべてが可能になる。

ⓑ「貧しい人（プトーコス）」は、物乞いをしながら、他人の施しに頼って生きる貧困状態を表す言葉である。また経済的に貧しい者は、富や権力といった人間的な力からも疎外されているので、唯一の助け手として神に信頼せざるをえない。この語の背景にあるヘブライ語は、経済的な貧しさのみならず、神に寄り頼む謙虚な人の姿をも表す（マタ五 3）。持ち物を売って貧しい人に施すのは、隣人と共に生きるためであると共に、自分自身も神への信頼に身を置くためである。